鹿児島市立美術館
市美だより 2020.秋号

物語の世界へ誘う舞台美術
和田 英作（1874～1959）

《「指鬘縁起」舞台背景第一幕の下絵》1919 年頃

《「指鬘縁起」舞台背景第三幕の下絵》1919 年頃　※特別企画展「乙女のモダンデザイン」(~11/15)で展示

明治 44（1911）年、日本初の西洋式劇場として帝国劇場が誕生しました。パリのオペラ座をモデルにした白亜の劇場は、近代的な都市文化を象徴する存在となり、「今日は帝劇、明日は三越」の文句が一世を風靡しました。和田英作は劇場の天井画と食堂の壁画を手がけ、さらに芸術顧問として開場後も舞台美術にかかわりました。

当館に下絵で残る「指蔓縁起」は、帝国劇場で大正 11（1923）年に上演された山本有三による戯曲の舞台背景です。フランスで外光派の絵画とアール・ヌーヴォーの装飾芸術を学んだ和田は、「指蔓縁起」公演の前年に再びヨーロッパに渡り、最新の舞台美術にも触れました。鮮やかな色彩と異国情緒あふれる装飾的表現は、ヨーロッパで人気を博していたロシア・バレエの舞台美術に影響を受けています。

和田の教え子であった藤田嗣治も帝国劇場の舞台美術を手伝っており、後に彼自身も舞台の仕事に携わりました。

発行：鹿児島市立美術館　〒892-0853 鹿児島市城山町 4-36　TEL：099-224-3400　FAX：099-224-3409

秋の収蔵品展
10 月 13 日(火)～12 月 20 日(日)

このたび郷土作家作品をより多くご覧になりたいという声に応え、黒田清輝や藤島武二、橋口五葉などの展示点数を増やし、特集展示をミニ特集としてお届けすることと致しました。

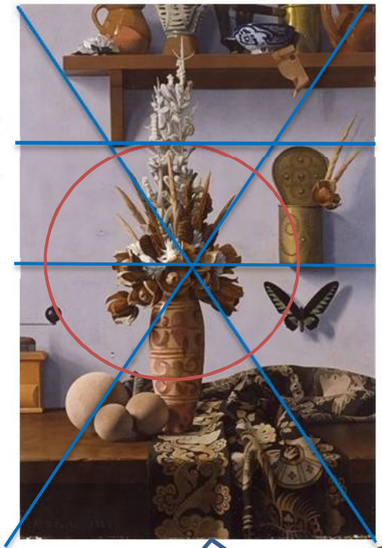
ミニ特集　静物画と構図

基本的に自然の一部を切り取って見せるという側面の強い風景画や人物画と比べ、静物画はまったく異なるアプローチを取ります。テーブルの上に、何をどのように配置するのか、つまりモチーフを構成する時点からすでに制作は始まっているのです。

花瓶や果物たちの形作る構図、画面全体での色の響き合い、そしてどこにどのような光を当てるのか、画家は試行錯誤を続けます。そういう意味では極めて人工的な絵画ジャンルであり、静物画がフランス語では、ナチュール・モルト（死んだ自然）と呼ばれることとも関連があるでしょう。一方で興味深いことに、構図に際しては黄金分割のような定められた法則よりも描き手の勘の方が何より重要だという点が、多くの静物画家によって指摘されています。

今回のミニ特集では、それぞれの静物画の構図を考察した解説キャプションも付与しました。写実の限りを尽くした安達真太郎や伊牟田経正から、奔放な色遣いの堀之内一誠、抽象化を進めた山口長男まで、郷土ゆかりの洋画家たちによる静物画の競演をお楽しみください。

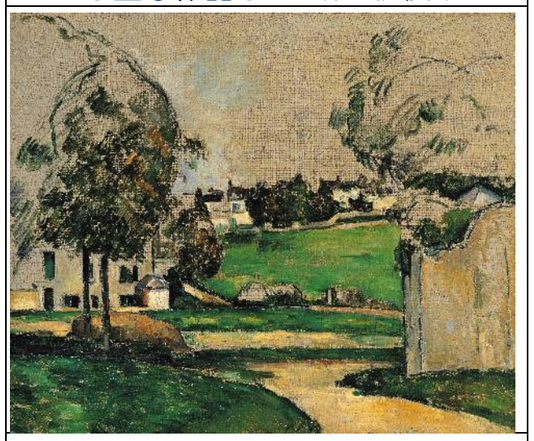
安達真太郎《ドライフラワー》1967 年
※説明のための構図線が入っています。



画面の中心に上向きのバラが配されています。縦に四分割した横線や、二本の対角線に沿って様々なモチーフが配置されているのが分かります。なかでも、左下の３つの球の陰によって、左から右に下がる対角線の角度から光が差していることに気づかされます。

花瓶の背後には円く余白が取られていて、主役のドライフラワーにスポットライトが当たっているような効果を上げています。

●主な作品●　西洋：油彩画



ポール・セザンヌ《北フランスの風景》1885～87 年頃

発行：鹿児島市立美術館　〒892-0853 鹿児島市城山町 4-36　TEL：099-224-3400　FAX：099-224-3409